

PAM通信 コラム

2007年12月発行

<第9回>タイトル：M君の話（その3：助け合いのシステム）

優しいけれど弱者であるM君は人類の未来にとって大切な存在であることを前回のコラムでは考えてみました。今回はM君のような弱者が強者の中で生き残っていく仕組みについて考えてみます。

M君の話の初回でも触れたように、助け合いのシステムは弱肉強食のシステムより“個人プレーを行う強い個人の集団より、チームプレーを行う弱い個人の集団のほうが生存に有利である”ことに存在の起源があります。例えば、自分で得た食物を自分だけで食べる集団のメンバーは、自分で食物が得られない時が続くと餓死してしまいます。しかし、自分で得た食物を他人にも分け与える集団のメンバーは、自分で食物が得られない時でも食物を得られた他のメンバーに分け与えてもらえることで餓死する率が下がります。つまり、助け合いのシステムとは他者を助けているように見えても自分を助けるシステムなのです。

とは言え、チームプレーを行う集団には弱点があります。集団の中に、自分は他のメンバーを助けないけれど他者からは助けてもらう個人が入り込むと、助け合いのシステムは上手く働かなくなってしまいます。しかし人は、この様な搾取するだけの個人に対抗するため、搾取者を見つけ出し排除する心の仕組み（社会関係的思考に敏感な心）を持っていると考えられています。これが社会的ルールに発展したものが道徳や法律であるとの説もあります。ですが、現代社会は助け合いのシステムが始まった遙か昔に比べ、チームプレーを行う集団のメンバー数が多くなってきたことで、搾取するだけの個人が見つかり難い状況にあります。つまり、現代社会では道徳や法律が働き難く、誰もが搾取者になって美味しい思いをしたくなる状況にあり、助け合いのシステムがうまく働き難いと考えることができます。生物としての助け合いのシステムだけでなく道徳や法律で考えても、目先の利益にとらわれ自分の利益だけを求めることは本人にとっても良い結果を生まないはずなのですが…。

では、搾取者の脅威や、自分が搾取者になって美味しい思いをしたくなる誘惑に負けず、M君のような弱者が幸せに生きていける社会を実現するにはどうしたら良いでしょう、そしてそれはどんな社会なのでしょう？この点については次回のコラムで改めて考えて見たいと思います。